

布志名大谷 I 遺跡(1号墳)

一般国道9号松江道路（連結部）建設予定地内
埋藏文化財発掘調査報告書1

2001年3月

松江国道工事事務所
教育委員会

布志名大谷Ⅰ遺跡(1号墳)

一般国道9号松江道路（連結部）建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書1

2001年3月

国土交通省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

国土交通省中国地方整備局松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路予定地内にある埋蔵文化財については道路事業者の負担によって必要な調査を実施し記録保存を行うため、島根県教育委員会と協議し同委員会の御協力のもとに昭和50年度から発掘調査を行っています。島根県八束郡玉湯町布志名地区においては当松江道路と中国横断自動車道尾道松江線と県道の連絡部にあたり、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら道路建設を進めて参りました。

本報告書は平成10年度に島根県八束郡玉湯町布志名で実施した布志名人谷I遺跡（1号墳）の発掘調査の記録であります。この記録調査が遙かな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を越えてよみがえらせ、また現代に生きる私たちの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査及び本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成13年3月30日

国土交通省中国地方整備局松江国道工事事務所

所長 石井一生

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）から委託を受けて、かねてより一般国道9号松江道路建設予定地内の発掘調査を行っておりますが、平成10年度からは、八束郡玉湯町布志名地区の調査に取り組んでおります。

本報告書は、平成10年度に実施した玉湯町布志名地区に所在する布志名大谷I遺跡（1号墳）の調査結果をとりまとめたものです。1号墳は古墳時代前期の大形方墳であることがわかり、この地区的古墳時代のはじまりの状況を知る手がかりとして、初めての資料となりました。この地域は宍道湖を北に望む眺望絶佳の地であり、西にはめのうの産地である花仙山も位置しています。また、大角山古墳群をはじめに多数の古墳も確認されています。

本書が郷土の文化財に関する貴重な資料として、学術並びに教育のために広く活用されることを期待いたしますとともに、埋蔵文化財の保護・啓発に対し、今後とも格別の御理解を賜りますれば幸甚に存じます。

今回の発掘調査及び本書の作成にあたり、御協力いただきました地元の方々をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月30日

島根県教育委員会

教育長 山 崎 悠 雄

例　　言

1 本書は、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、島根県教育委員会が平成10年度に実施した一般国道9号松江道路西地区の道路建設工事に伴う布志名人谷Ⅰ遺跡（1号墳）の発掘調査報告書である。

2 調査組織は次の通りである。

【事務局】

勝部 昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、福田 敏（主査）

島地徳郎（課長補佐）、秋山 実（課長補佐）、川崎 崇（企画調整係主事）

【調査員】

是山 敦（埋蔵文化財調査センター主事）、難波孝之（同教諭兼文化財保護主事）

勝部幸治（同講師兼主事）

【遺物整理員】

木村範子、高橋幸江

【調査指導】（敬称略）

小田富士雄（福岡大学人文学部教授）

渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

池山満雄（島根県文化財保護審議会委員）

蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員）

3 発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）、島根県教育委員会、社中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部

【現場担当】 布村幹夫（現場事務所長）、松近秀夫（技術員）、持田明典（技術員）

【事務担当】 篠原律子（事務員）

4 掘図中の方位は、測量法による平面直角第Ⅲ座標系のX軸方向を指す。従って、磁北より7°55'、真北より0°21'東の方向を指す。レベル高は海拔高を指す。

5 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を利用した。

6 本書に掲載した遺物の整理、実測、図版の製作には上記の調査員のほか以下の者が行った。

福場康芳（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター教諭兼主事）、名越顕秀（同教諭兼主事）、

曾田 徹（同臨時職員）、上山直志（同臨時職員）、吉岡朋子（遺物整理員）、

錦織美千恵（遺物整理員）

7 報告書の作成にあたっては、以下の方々から有益な御助言をいただいた。記して感謝の意を表する。（敬称略）

柳本照男（豊中市教育委員会）、一瀬和夫（大阪府立近つ飛鳥博物館）

8 本書で使用した遺構記号は次の通りである。

P…ピット SK…土壙 SX…その他

- 9 本書に掲載した遺物の写真撮影は以下の者が行った。
是田 敦、橋 弘章（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター教諭兼文化財保護主事）、
池山哲也（同教諭兼主事）
- 10 本書の執筆は是田 敦、名越頴秀が行った。
- 11 本遺跡出土資料及び実測図・写真等の資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

本文目次

序

序

例言

本文目次

挿図目次

図版目次

表目次

第1章 調査に至る経緯（是田 敦）	1
第2章 遺跡の位置と環境（名越顯秀）	1
第3章 布志名大谷I遺跡（1号墳）の調査（是田 敦）	
第1節 調査の経過	9
第2節 遺構と遺物	11
第3節 ま　と　め	26

挿図目次

第1図 布志名大谷I遺跡の位置	1
第2図 布志名大谷I遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25000)	7
第3図 調査前地形測量図 (S=1/400)	9
第4図 布志名大谷I遺跡調査×配置図 (S=1/1000)	10
第5図 布志名大谷I遺跡 (1号墳) 道構配置図 (S=1/200)	12
第6図 布志名大谷I遺跡 1号墳東西南北土層実測図 (S=1/100)	13~14
第7図 第1主体部実測図 (S=1/60)	15
第8図 第1主体部粘土模実測図 (S=1/60)	16
第9図 第2主体部実測図 (S=1/60)	17
第10図 第3主体部実測図 (S=1/30)	18
第11図 第3主体部埋葬施設実測図 (S=1/30)	19~20
第12図 第4主体部実測図 (S=1/60)	21
第13図 第5主体部実測図 (S=1/60)	22
第14図 土器棺墓実測図 (S=1/20)	22
第15図 SX01実測図 (S=1/60)	23
第16図 布志名大谷I遺跡 (1号墳) 出土遺物 (1) (S=1/3・2/3)	24
第17図 布志名大谷I遺跡 (1号墳) 出土遺物 (2) (S=1/3)	25

表 目 次

第1表 布志名大谷I遺跡周辺の遺跡	8
第2表 出雲地域における共通編年3期の占墳	28
第3表 布志名大谷1号墳主体部計測値表	29
第4表 布志名大谷1号墳出土遺物観察表	29

図版目次

図版1	穴道湖を望む	上右 第3主体部 石棺を覆う割石の目 貼り粘土除去状況
図版2	布志名地図を望む	下左 第3主体部 石棺を覆う割石・石 棺天井部除去状況
図版3	松江市街地を望む	下右 第3主体部 石棺を覆う割石側面 検出状況
図版4	上空からの撮影	図版13上左 第3主体部 石棺を覆う割石除去 状況
図版5	布志名大谷I遺跡(1号墳)全景	上右 第3主体部 石棺検出状況
図版6上	第1主体部 粘土櫛検出状況	下左 第3主体部 石棺目貼り粘土除去 状況
中	第1主体部 粘土櫛内埋土除去状 況	下右 第3主体部 完掘状況
下	第1主体部 粘土櫛除去状況	図版14上 第3主体部 石棺を覆う割石・石 棺天井部除去状況
図版7上	第1主体部 木口部石除去状況	中 第3主体部 石棺を覆う割石除去 状況
中	第1主体部 完掘状況	下 第3主体部 石棺除去状況
下	手前から第1主体部、第3主体部 第4主体部、第5主体部 完掘状 況	図版15上 第3主体部 南北セクション
図版8上	第1主体部 粘土櫛南北セクショ ン北側	中 第3主体部 南側木口部石検出状 況
中	第1主体部 北側木口部粘土櫛流 入状況	下 第3主体部 南側木口部石除去状 況
下	第1主体部 北側木口部セクション	図版16上左 土器棺墓 検出状況
図版9上	第1主体部 粘土櫛南北セクショ ン南側	上右 土器棺 出上状況
中	第1主体部 南側木口部粘土櫛流 入状況	下左 土器棺内泥土 除去状況
下	第1主体部 南側木口部セクショ ン	下右 土器棺墓 完掘状況
図版10上	第1主体部 東西セクション	図版17上左 SK01 完掘状況
中左	第1主体部 Pit.1	上右 墳丘斜面出土土器の出土状況
下左	第1主体部 Pit.2、Pit.3	下左 墳頂より穴道湖を望む
下右	第1主体部 遺体埋葬状況推定	下右 布志名大谷1号墳遠景
図版11上	第2主体部 完掘状況	図版18 布志名大谷I遺跡(1号墳)出土 遺物
中	第4主体部、第5主体部 完掘状 況	
下	第4主体部、第5主体部 遺体埋 葬状況推定	
図版12上左	第3主体部 石棺を覆う割石検出 状況	

第1章 調査に至る経緯

一般国道9号松江道路は、松江市街地の交通渋滞の解消を目的に昭和47年に都市計画決定され、起点の八束郡東出雲町出雲郷から終点の八束郡玉湯町布志名に至る10.7kmにおいて建設工事が進められている。

中国横断自動車道尾道松江線との連結部分に当たる玉湯町布志名の終点部分（便宜上「松江道路連結部」と呼ぶ）について、平成2年に建設省（現国土交通省、以下同じ）松江国道工事事務所から島根県教育委員会に建設予定地内の遺跡に関する照会があった。これを受けて島根県教育委員会は平成8年に建設予定ルートの分布調査を実施し布志名大谷Ⅲ遺跡の存在を確認した。布志名大谷Ⅰ遺跡（1号墳）については、平成7年度に実施された松江道路西地区（松江市福富町から八束郡玉湯町布志名に至る1.6km区間）建設予定地内に伴う埋蔵文化財発掘調査すでに確認されていた（布志名大谷Ⅰ遺跡は1号墳を除く部分4,250m²の発掘調査を平成7年に松江道路西地区建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施している）^④。この調査結果を踏まえ平成10年7月1日付けて建設省松江国道工事事務所と島根県教育委員会との間で発掘調査の委託契約が交わされた。大谷Ⅰ遺跡1号墳の発掘調査は、平成10年8月から開始し12月までの5ヶ月をかけて調査をした。その結果、古墳時代前期の方墳を検出した。

（1）『布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡 一般国道9号松江道路（西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4』 1997 島根県教育委員会

第2章 遺跡の位置と環境

布志名大谷Ⅰ遺跡は八束郡玉湯町布志名に所在する遺跡である。遺跡は玉湯町に位置する花仙山（標高199.7m）から派生した宍道湖に向かって伸びる低丘陵上に立地している。玉湯町は宍道湖の南東岸に位置し、東は松江市、南は大原郡大東町、西は宍道町と境界を接している。人口約6000人、言わずと知れた温泉の町であり、伝統工芸の布志名焼や瑪瑙細工などが特産である。

奈良時代の天平5年（733）に編纂された『出雲国風土記』（以下『風土記』と略す）

によれば、現在の玉湯町の町域は、意宇郡押志郷の東部と、意宇郡忌部神戸の西半分にあたる。町の北部には国道9号とJR山陰線が東西に通っているが、これらは古代山陰道のルートには沿っていると思われる。町の中央部分を玉湯川（『風土記』では正作川）が北流するが、この川を遡って山間に分け入る県道は、意宇郡家から大原郡家、飯石郡家を経て、やがて備後国に通ずる通道（当時の官道）に相当するものと考えられる。また、『風土記』の意宇郡条には布志名の地名の



第1図 布志名大谷Ⅰ遺跡の位置

もととなつたと思われる「^{フジノ}布自奈社」の名が記されている。この布自奈社は花仙山中腹にある布自名社に比定されている。

『風土記』によれば、押志郷には正倉が置かれたと記されており、この所在地は玉湯町林村本郷に比定されている。また、『風土記』編纂当時の意宇郡の郡役人は、大領の出雲臣広嶋以下ほとんどが出雲臣であるが、主政（三等官）は林臣であった。林臣は押志郷の豪族で、皇族に連なる一族として付近一帯に隠然たる勢力を誇っていたようである。後述するが、林村には前方後円墳を含む50基から構成される林占墳群があり、林臣との関わりが連想されるところである。

『風土記』の忌部神戸の条にも興味深い記述がある。「忌部神戸。郡家の正西二十一里二百六十歩なり。國造、神古詞奏しに、朝廷に参向ふ時の御沐浴の忌正作る。故、忌部と云ふ。即ち川の邊に湯を出す。出湯の在る所は、海陸を兼ねたり。仍りて男も女も、老いたるも少きも、或るは道路を駒驅ひ、或るは海中を洲に沿い、日に集ひて市を成し、續縫燕樂ぶ。一たび濯けば形容端正しく、再び浴すれば、萬病悉に除くる。古より今に至るまで臉を得ずといふことなし。故、俗人、神湯と曰ふなり」というもので、この記述から、この時代、すでに玉造温泉は老若男女が集い賑わう歓楽地であったことが分かる。さらにはここから、この地では出雲国造家がその地位に就く際に禊ぎが行われ、また天皇に獻上するための玉の製作が行われていたことも明らかにされている。

このような形態における玉の献上がいつ頃まで行われたものかははっきりしない。しかし、延長5年（927）に編纂された『延喜式』には、「出雲国造神寿洞を奏す。玉六十八枚。赤水精八枚、白水精十六枚、青石玉四十四枚…」とあることから、少なくともこの頃までは行われていたようである。また『延喜式』には、「凡そ出雲国の進る所の御富岐玉六十連。三時大殿祭料卅六連、臨時廿四連。毎年十月以前、意宇郡神戸玉作氏をして造り備へしめ、使いを差して進上す」ともあり、大殿祭等の儀式のため、出雲の者が毎年進上されていたことが分かる。さらに、『正倉院文書』の「出雲国計会帳」によれば、天平5年（733）の8月19日に、真珠などとともに「水精」が進上されていることが分かる。あるいは、「九条家本『延喜式』卷」の裏文書にある「主祝寮出雲国正税返却帳」によれば、長保2年（1000）や同4年に、「水精」の進上に応じて税糧が返却された事實を確認できる。一般に正作は、弥生時代から広い地域で行われるが、律令時代になると廃れる。ところが出雲の正作は、古墳時代後期に最盛期を迎へ、少なくとも11世紀初頭までは続いていたことが文献から明らかである。そして、その出雲における正作の中心は、玉湯川の流域と、東に隣接する松江市の忌部川流域である。これは両河川の間に、正の原石になる良質の瑪瑙や碧玉の産出地である花仙山（『風土記』には正作山と記載）があるためで、この辺りは、全国でも例を見ない正作遺跡の集中地域となっている。

このように、玉湯町とその周辺は、正作を中心に歴史的に興味深い地域である。ここでは、主要遺跡の紹介を通じて、この地域の歴史を概観しておきたい。

旧石器時代

島根県内では、この時代にまで遡ることのできる遺跡は多くはないが、近年、宍道湖・中海沿岸地域を中心に、少しずつ資料が集まっている。玉湯町林村の鳥ヶ崎遺跡からは中期旧石器時代まで遡る可能性を持つ剥片や石核などが採集されており、玉湯町湯町の杉谷遺跡からは後期旧石器時代の石器・細石刃が確認され、また、松江市乃木福富町の廻田遺跡からは、後期のナイフ形石器が出土している。

縄文時代

玉湯町内にはこれといった資料がないが、周辺地域では遺跡が増加してくる。松江市の乃木湖岸遺跡や、宍道町の野津原II遺跡で発見された有茎尖頭器は、縄文時代草創期のものと推定される。土器が見つかっていないため時期の限定が難しいが、縄文時代後半と推定される遺跡に、宍道町東来待の弘長寺遺跡がある。この遺跡は、狭い範囲から豊富な種類の石器を大量に出土したことから、特に石錘の出土量が多いことから、漁労が活発に行われたことがうかがえる。その他、縄文後期から晩期の深鉢が出土した、東来待の三成遺跡などがある。

旧石器時代に深い谷であったと推定される宍道湖・中海沿岸地域は、縄文時代になって気候が温暖化すると海面が上昇し、水道状を呈するようになったと考えられる。このためこの地域は、前面に潮水、背後には低丘陵が控え、漁労や狩猟に適した住みやすい環境だったと思われる。従って玉湯町内においても、今後この時代の遺跡が発見される可能性は充分にある。

弥生時代

鳥根県教育委員会が昭和61年（1986）に行った玉作遺跡分布調査では、53の遺跡が報告されている。その大部分は古墳時代以降のものであるが、弥生時代のものも幾つか確認できる。

出雲での玉作は、弥生時代前期にまで遡ることができる。現在のところ、鳥根県下で最古の玉作遺跡は松江市の西川津遺跡で、緑色凝灰岩を使って管玉が生産されていた。中期の遺跡としては、松江市竹矢町の布田遺跡がある。後期の遺跡としては、松江市矢田町の平所遺跡があり、ここでは水晶製の算盤玉や丸玉、碧玉製の管玉等を生産していた工房跡が発見された。玉湯町域での玉作の開始は、古墳時代まで下るものと從来は考えられてきた。しかし、昭和58年（1983）～59年（1984）、出雲玉作跡宮ノ上地区で実施された発掘調査では、工房跡は検出されなかったが、弥生末期～古墳時代前期の土器とともに玉類未成品が出土しており、玉作開始が弥生時代にまで遡る可能性が出てきた。

玉作に直接は関わらないが、そのほか重要な遺跡には、松江市乃木福富町・乃白町・浜乃木町にまたがる山和田遺跡群がある。ここでは以前から、全長約20mの後削の前方後円墳である田和山1号墳をはじめとする古墳群の存在が知られていたが、それに加えて3重の環濠が巡る遺跡が検出された。時期的には弥生時代前期～中期とされる。田和山遺跡群から北東約250mのところには、友田遺跡がある。この遺跡は前削～中期の土壙墓26基、中期の墳丘墓6基、後期の四隅突出形墳丘墓1基などから構成される墳墓群で、土壙墓群からは勾玉や管玉のほか大量の石器が出土したため、「戦士の墓」と呼ばれる。

玉湯町内では、四隅突出型墳丘墓のある布志名人谷Ⅲ遺跡や、後期古墳7基のほか弥生時代～平安時代にかけての住居跡や加工段が検出された大堤Ⅱ遺跡がある。

宍道町東来待の三成遺跡からは3基の墳墓が発見されている。当初、これらは中期の古墳と報告されていたが、近年になって弥生時代の墳丘墓の可能性が指摘されている。特に2号墓は貼石が認められるもので、注目される。弥生時代中期～後期の来待地区に、有力な集団が存在していた可能性をうかがわせるものである。白石から佐々木にかけての丘陵地帯では、山守免遺跡、野津原II遺跡、上野遺跡、上野II遺跡など、高地性集落が次々と発見されている。

古墳時代

玉作関係の遺跡が数多く出現し、特に玉湯川と忌部川の流域に集中して営まれる。

玉湯川の流域では、宮垣地区、玉ノ宮地区、宮ノ上地区の3か所が国指定の史跡となっている。宮垣地区は記加羅志神社跡を中心に立地しており、古墳時代前中期～平安時代の工房跡が約30棟検出されたほか、玉の原石や玉類の未成品、砥石、穿孔用の鉄製錐など、大量の玉作関係の遺物が出土した。また、同一の造構から玉作関連と生活関連の遺物が同時に出土していることから、玉作工房と住居が一体になっていたことが明らかになった。宮ノ上地区は玉作湯神社境内に位置する。玉作湯神社は『風土記』や『延喜式』に記載のある古社で、大穴持命、少彦名命に加えて、玉の神である御明玉命を祭神としている。この地区は、玉作開始が玉湯町内では最も早く、弥生時代まで遡ると推定されるが、古墳時代前期と後期の玉作の舞台でもあった。玉ノ宮地区には、御明玉命を祭る玉ノ宮という神社が、大正年間まで存在した。ここでは玉作に関わる明確な造構は確認されていないが、古墳時代～奈良時代にかけての玉作関連の遺物はまとまって出土している。また、この地区からは、鐵津や炉壁とともに7世紀と9世紀と推定される精鍊炉が2基検出され、製鉄が行われていたことも明らかになっている。この製鉄遺跡で生産された鉄製品が、玉作の工具として使われたものなのか、製鉄と玉作の関連が興味深い。このほか玉湯川の流域には、平床遺跡、日焼廻遺跡、狐廻遺跡など多数の玉作遺跡が存在している。玉湯川の流域からは離れるが、林村の堂床遺跡は、6世紀後半～7世紀前半に、26棟の工房が営まれた遺跡として注目される。

忌部川流域は、玉湯川流域に次いで玉作遺跡が集中して存在する。このうち後原玉作跡からは、石釧の未成品が出土しており、古墳時代前期に遡るものと考えられる。また中島遺跡では、中期の工房跡が確認されている。大角山遺跡は、竪穴住居跡5棟から構成される中期の玉作遺跡である。出土した土師器に形式差がほとんどなく、住居跡相互の切り合い関係もないことから、ごく短期間営まれた集落と考えられる。

古墳や横穴墓は、やはり玉湯川流域に多く分布している。このうち徳連塙古墳は、5世紀末頃の築造と考えられる小型の円墳である。玉造築山古墳もほぼ同時期の築造と思われ、墳形が明確ではないが、やはり円墳と推定される。双方とも、地元では白粉石または白米侍と呼ばれる石英安山岩質凝灰岩を石材とする舟形石棺を用いているという特徴がある。宍道町西米侍の横山古墳でも同じ石材を利用した舟形石棺を持つなど、舟形石棺は中海・宍道湖岸に廣く分布している。報恩寺古墳群は6基のうち5基までが小型の円墳だが、1基は全長約50mの前方後円墳で、玉湯町では扇廻古墳と並ぶ最大の古墳である。5～6世紀の築造と考えられる。6～7世紀になると、この地にも多くの横穴墓が出現するようになる。花立横穴群は5穴で構成される。調査段階で現状をとどめていたのは2穴のみだが、もともとは、全ての横穴で白粉石（石英安山岩質凝灰岩）を石材とする切り石を組み合わせた箱式石棺を収めていたと考えられる。副葬品のほとんどは須恵器で、頭部と足元に分けて置かれている。岩屋守跡横穴群は国指定史跡で、來待石（凝灰質砂岩）の岩盤を掘り込んでつくられている。2穴で構成され、2穴とも4隅を柱状に陽刻するなど、極めて人念な構造である。岩屋遺跡は、岩屋跡跡横穴群の西側の尾根続きにあり、I区に存在する古墳群は後期のものである。玉湯川が形成した平野は狭小で、この地域の農業生産力も高くはなかったであろう。それにも関わらず、不相応に思えるほどの数や規模の古墳が築造された背景としては、玉作との関連性を考慮すべきであろう。

林村にも古墳や横穴墓は多く存在する。中でも林古墳群は、宍道湖に突出する低丘陵上に50基が密集する、玉湯町内では最大規模の古墳群である。前述のように、この古墳群は林臣と密接な関わ

りがあると考えられる。大部分が小型の円墳だが、方墳1基、前方後円墳4基も含まれる。このうち43号墳は全長約18mの小型の前方後円墳で、横穴式石室を持つ。6世紀中期～後期の築造と思われ、出雲における横穴式石室の出現期のものとして重要である。また、多くの副葬品が認められたが、そのうち、玄室内から出土した須恵器壺の出土状況にも注目が必要である。それは、2つの壺を並べたもので、奥壁の近くに2セット、玄門付近に1セットの、計3セットが存在した。これは、壺を枕に転用したものと考えられる。

布志名地区にも、古墳がある程度まとまって存在している。本書で報告する前期の布志名大谷1号墳の他に、中期の櫛の木古墳群、後期の大堤Ⅱ遺跡の古墳群がある。

忌部川流域では、二名留古墳群、大角山古墳群、向原古墳群、山和山古墳群、松本古墳群、菅沢谷横穴群、弥陀原横穴群などが知られ、何れも中期以降のものである。このうち大角山1号墳は、全長60m余りの大規模な前方後円墳である。山和山1号墳は、全長約20mの小型の前方後円墳であるが、前方後円墳の築造が減り横穴墓が主流になる6世紀後半になって、あえて前方後円墳を築造しているところが興味深い。また、二名留2号墳からは、5世紀後葉のものと比定される子持勾玉が出土している。

奈良・平安時代

律令時代になると全国的に玉の生産は行われなくなり、玉作遺跡の発見例は花仙山の周辺だけにほとんど限定される。製作された玉類がどのような性格のものであったかは、前述の通りである。この時期の主な玉作遺跡には蛇喰遺跡がある。蛇喰遺跡は出雲玉作跡宮垣地区の西に隣接する遺跡で、豊穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。ここで注目されるのは、第一にヘラ書き文字のある須恵器が500点以上出土したこと、これは一遺跡としては全国的にも類を見ないほどの出土量と言える。文字には「白田」、「山」、「有」、「林」などが多く見られた。「山」や「有」が、「湯」に通ずるなど、地名を連想させるものが多い。またこれらの須恵器は、松江市東总郷町の湯崎窯跡で生産されたものと考えられる。因みに湯崎窯跡は、花仙山の南麓、玉造と忌部を結ぶ道筋に存在した遺跡で、出雲国境もここから須恵器の供給を受けていた。また、一般に、寺院や官衙からの出土が多いとされる円筒硯、縁軸、製塙土器が多く出土している。玉類の未完成品は半玉を中心に大量に出土しているが、完成品に近いものが多くを占めた。その他の遺跡としては、林村に、瓦類や礎石が出土した松ノ前廃寺があり、林臣一族が建立した私寺と考えられている。

鎌倉・室町時代

全国的に山城が多く出現する時期であり、玉湯町周辺地域も例外ではない。特に玉湯川に沿って山間に分け入る谷筋には、古代から奥出雲に通じる重要な街道が設けられており、付近には山城が密集している。玉作湯神社の西側には、玉造要害山城跡がある。標高約108mの小山塊にあり、規模は大きくないが、奥出雲への街道と湯崎を越えて忌部に抜ける間道を押さえる、交通の要衝に立地している。毛利氏による改修も想定できるが、築城は鎌倉時代末期にまで遡り、湯氏の居城であったと考えられている。

江戸時代

その創設については諸説あるが、18世紀の中頃までには、布志名の地で布志名焼が始まった。一説には、富士名義綱（後醍醐天皇の船上山での拳兵に、塩治高貞とともに真っ先に駆せ参じたとい）の家臣船木与兵衛次政の末裔を名乗る与次兵衛村政が、明和年間（1764～1772）に開窯したと

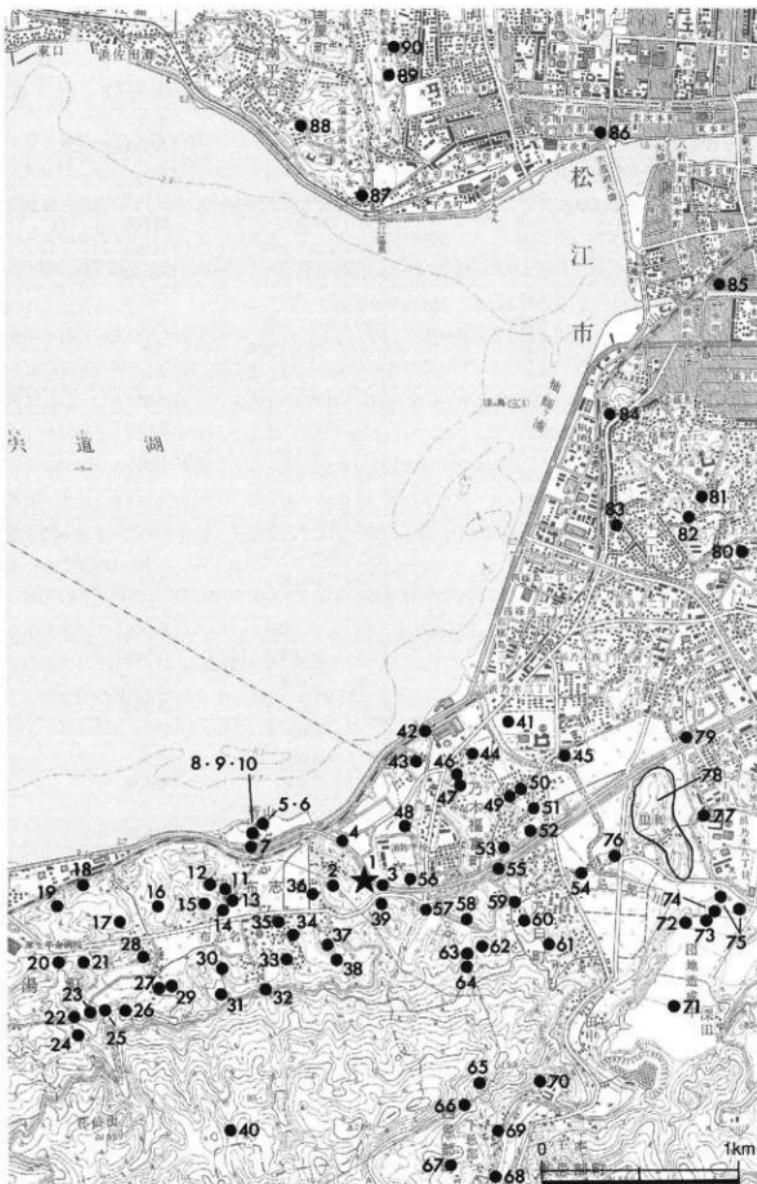
伝えられる。真偽のほどはもう一つ定かではないが、この船木一族や、土屋氏、永原氏らによって布志名焼は発展し、松江藩主松平治郷の手厚い保護などもあって大いに繁栄した。宍道湖南岸の若山付近を中心に多くの窯跡が存在しており、現在もなお、4つの窯元が操業している。

【註】

松沢並生 1994「島根・鳥ヶ崎遺跡他探査の石器群（5）一刺離面の入為、自然為の検討資料として—」
『旧石器考古学』48 旧石器文化談話会

【参考文献】

- 加藤義成『修訂 出雲国風土記究編』 1957 松江今井書店
『玉湯町史 上巻』 1961 玉湯町
『新修島根県史 史料篇1』 1966 島根県
『新修島根県史 通史編1』 1968 島根県
『玉造 鳥坊遺跡群 一古墳群・集落跡・古墓群の記録』 1970 玉湯町教育委員会
『史跡出雲王作跡 一発掘調査概報』 1972 玉湯町教育委員会
加藤義成「文献に見る玉作りについて 一出雲國風土記を中心として—」
『松江考古 第2号』 1979 松江考古学談話会『玉湯町史 下巻（-）』 1982 玉湯町
『松江灘都市計画事業案 本土地区向賀理事事業区域内埋蔵文化財包括地発掘調査報告書』 1983 松江市教育委員会
『史跡出雲王作跡 一宮ノ上地区 一第1次発掘調査概報』 1984 玉湯町教育委員会
『史跡出雲王作跡 一宮ノ上地区 二第2次発掘調査概報』 1985 玉湯町教育委員会
『島根県生産遺跡分布調査報告書IV 王作関係遺跡』 1987 島根県教育委員会
『史跡出雲王作跡 一ノ木官地区 一第1次・2次発掘調査概報』 1988 玉湯町教育委員会
勝部 南『玉造・花立横穴群』『島根県埋蔵文化財調査報告書 第XV集』 1989 島根県教育委員会
『川和山古墳群発掘調査概報』 1991 松江市教育委員会
『二名留古墳群発掘調査報告書』 1992 松江市教育委員会
『苦沢谷横穴群』 1994 (財)松江市教育文化振興事業団
加藤義成『古代文化叢書1 出雲國風土記論究』 1995 島根県古代文化センター
『二名留遺跡発掘調査報告書』 1995 (財)松江市教育文化振興事業団
『福富1遺跡・隈形1号墳 一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書2』 1997 島根県教育委員会
『松木古墳群・人角山古墳群・すべりぎこ古墳群 一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書3』 1997 島根県教育委員会
『布志名大谷I遺跡・布志名大谷II遺跡・布志名才の神遺跡 一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書4』 1997 島根県教育委員会
『古代出雲文化展 一神々の国 悠久の遺産』 1997 島根県教育委員会 朝日新聞社
『島根県教育庁文化財課 埼蔵文化財調査センター年報V』 1997 島根県教育委員会
『島根県教育庁文化財課 埼蔵文化財調査センター年報VI』 1998 島根県教育委員会
『川和山遺跡群発掘調査現地説明会資料』 1998 松江市教育委員会 (財)松江市教育文化振興事業団
『島根県教育庁文化財課 埼蔵文化財調査センター年報VII』 1999 島根県教育委員会
『宍道町史 史料編』 1999 宍道町
『蛇喰遺跡発掘調査報告書』 1999 玉湯町教育委員会
『玉造榮山古墳』(玉湯町立出雲王作資料館パンフレット) 玉湯町教育委員会
『龍恩寺古墳群』(玉湯町立出雲王作資料館パンフレット) 玉湯町教育委員会
『林古墳群第43号古墳』(玉湯町立出雲王作資料館パンフレット) 玉湯町教育委員会



第2図 布志名大谷I遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25000)

第1表 布志名大谷I遺跡周辺の遺跡

地図番号	遺跡名	種別	地図番号	遺跡名	種別
1	布志名大谷I遺跡	古墳・建物跡	46	堀山遺跡	散布地
2	布志名大谷II遺跡	古墳・四隅突出墳丘墓	47	堀山古墳	古墳
3	布志名才の神遺跡	祭祀遺跡	48	大角山遺跡	集落跡他
4	布志名大谷II遺跡	古墳・炭窯	49	屋形遺跡	散布地
5	灘舟木窯跡	窯跡	50	蓮花垣遺跡	散布地
6	後船島窯跡	窯跡	51	松本遺跡	散布地
7	空福島窯跡	窯跡	52	福富I遺跡	散布地
8	永原窯跡	窯跡	53	乃白玉作跡	工作跡
9	利平窯跡	窯跡	54	乃白遺跡	散布地
10	沢窯跡	窯跡	55	屋形古墳群	古墳
11	舟木藤平窯跡	窯跡	56	大角山古墳群	古墳
12	鍛冶山窯跡	窯跡	57	すべりざこ横穴墓群	横穴
13	鍛冶畠遺跡	散布地	58	松本古墳	古墳
14	布志名遺跡	建物跡	59	松本修法壇跡	修法壇跡
15	二斗貝古墳群	古墳	60	天塚古墳	古墳
16	大堤II遺跡	古墳・住居跡	61	乃白椎現遺跡	工作跡
17	大堤I遺跡	古墳	62	弥陀原横穴群	横穴
18	大堤古墳	古墳	63	松本横穴群	横穴
19	助次郎古墳群	古墳	64	岩屋口古墳	古墳
20	貞野谷遺跡	古墳	65	中埴古墳	古墳
21	樅ノ木古墳群	古墳	66	下鍛冶古墳	古墳
22	狐邊墳墓群	墳墓	67	宮の上遺跡	散布地
23	狐廻遺跡	玉作跡	68	小城口遺跡	工作跡
24	仲田古墳群	古墳	69	平松遺跡	工作跡
25	永丁部遺跡	玉作跡	70	清水尻遺跡	散布地
26	岩屋口遺跡	玉作跡	71	菅沢横穴群	横穴
27	布田遺跡	玉作跡	72	野向古墳	古墳
28	山崎横穴群	横穴	73	菅沢遺跡	散布地
29	中河原古墳群	古墳	74	大久保古墳群	古墳
30	宮田古墳群	古墳	75	大久保遺跡	散布地
31	後迫古墳	古墳	76	栗御前遺跡	散布地
32	小川古墳	古墳	77	後友田古墳群	古墳
33	布志名城山城跡	城跡	78	田和山遺跡群	弥生環壕・古墳
34	下山窯跡	窯跡	79	友田遺跡	墳墓
35	永保山窯跡	窯跡	80	宇賀II遺跡	散布地
36	茂芳口遺跡	散布地	81	毘沙門山古墳群	古墳
37	判官山古墳群	古墳	82	荒神古墳	古墳
38	伝富士名判官義綱古墓	古墓	83	伝佐々木高綱墓	古墓
39	足立窯跡	窯跡	84	堀尾忠晴墓	古墓
40	カナクソ谷鉢跡	製鉄遺跡	85	人參方跡	役所跡
41	欠田遺跡	散布地	86	茶町遺跡	散布地
42	福富湖岸遺跡	散布地	87	天倫寺前遺跡	散布地
43	二名留古墳群	古墳	88	荒原城跡	城跡
44	神立遺跡	散布地	89	松江藩主松平家廟所	墓地
45	福富II遺跡	散布地	90	K32古墳	古墳

第3章 布志名大谷I遺跡（1号墳）の調査

第1節 調査の経過

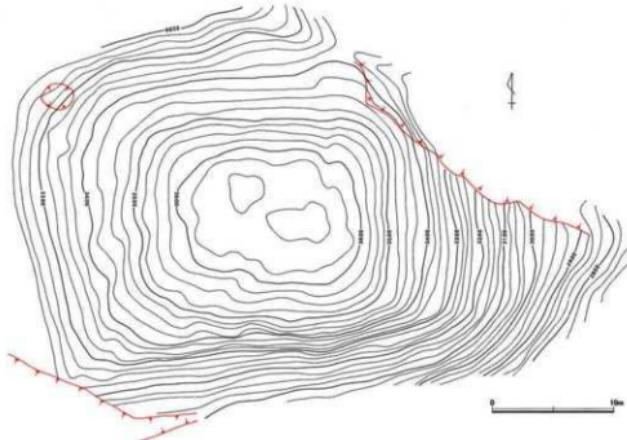
布志名大谷I遺跡1号墳（以下1号墳）の発掘調査は平成10年（1998）8月18日より開始した。1号墳は当初から古墳の可能性が高かったが、古墳であることの確認と範囲の確認のために、まず墳丘の中心を通るように東西南北の十字トレンチを設定し掘削した。この結果、3つの主体部（第1主体部、第2主体部、第3主体部）を検出し古墳であることを確認した。また同時に墳頂部から近世陶磁器や寛永通宝が出土したため、墳頂部には地形の変更が後世に加えられたことも判明した。

8月24日よりセクションベルトを残して墳頂部平坦面の表土の掘削を開始するが、布志名大谷III遺跡の試掘調査のため9月17日から10月5日まで1号墳の調査を中断した。

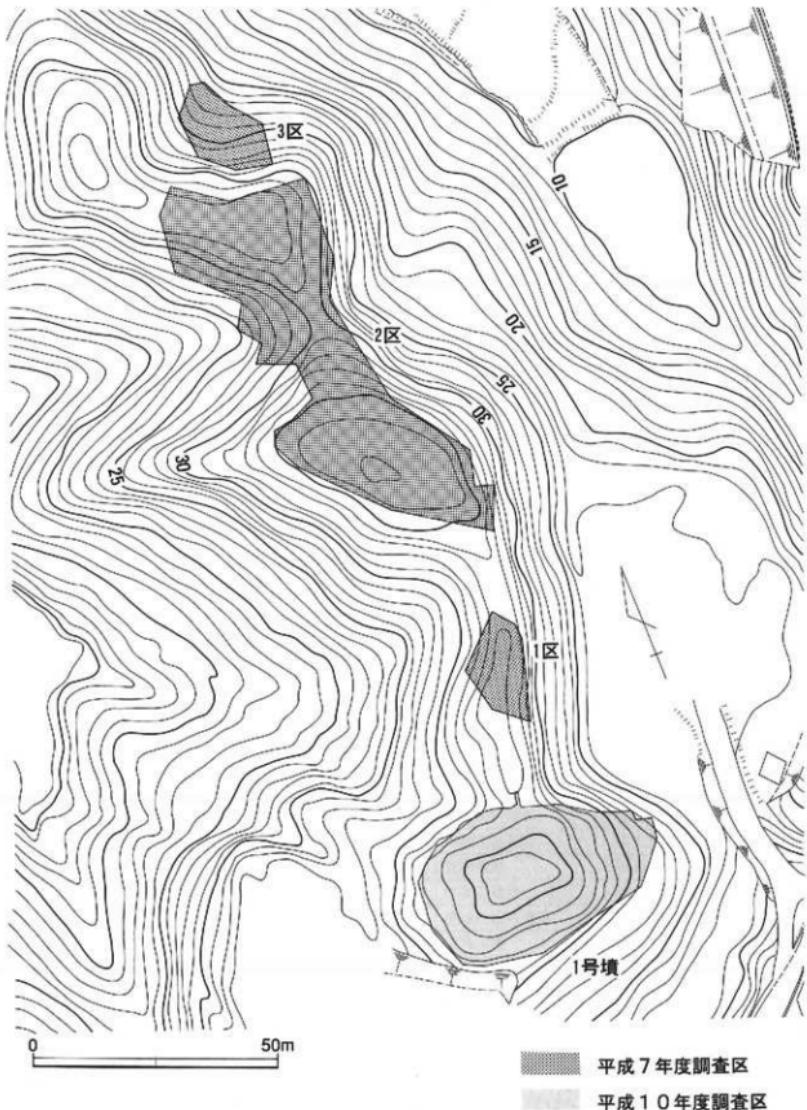
10月16日に第1主体部、第2主体部、第3主体部の平面プランを確認した。第4主体部と第5主体部は11月12日に確認した。主体部は平面プランを確認するとセクションベルトを設定し掘削した。墳頂部平坦面では結局5つの主体部を確認したが、このうち第1主体部では削竹形木棺を、第3主体部では石槨石棺を確認した。第1主体部では当初粘土椁を伴う可能性も考えた。これは木棺側面に施した目貼りの粘土が多量であった為で、結局粘土椁でないと判明した。第3主体部では当初石槨部分を石棺と思い込んで調査したが、石槨部を除去すると箱式石棺が出現したため石槨であることが判明した。

墳丘の表土掘削は11月30日に完了した。墳丘の規模は周溝を伴わないので当初は不明であったが表土を除去する過程において1m弱の帯状の平坦面が確認でき、この部分を墳裾とした。また表土の除去によりSX01と土器墓室を1基確認する事ができた。

11月28日に遺跡説明会を行い約100名が訪れた。12月22日に空撮を行い、12月25日から28日まで墳丘の地形測量を行い12月28日に発掘調査が終了した。



第3図 調査前地形測量図 (S=1/400)



第4図 布志名大谷I遺跡調査区配置図 (S=1/1000)

第2節 遺構と遺物

1 墳丘

墳丘の規模・形態（第5図・第6図）

1号墳の墳丘形態は東西に長い長方形を呈するものである。ただし南側については後世の改変が著しく正確な数値については明確にできなかった。

墳丘規模は東西約23m、南北約18mを測る。墳丘上面の平坦面は東西12m、南北8mを測る。墳裾には周溝ではなく、代わりに標高34m付近で約1m幅の平坦面を巡らしている。

墳丘の高さは、現状で墳裾の平坦面から約2mの高さを測る。ただし頂上部は後世の削平を受けているため築造時の高さは不明である。墳丘には葺石や埴輪は認められなかった。

墳丘の築成

墳丘は、まず、斜面部分の地山を削り出して整えている。墳裾は地山を削りテラスを築成している。墳頂部は削平のため詳細は不明であるが、墳丘の一部に盛り土が認められることから、地山整形後に盛り土をして、そして完成させたものと思われる。

墳丘斜面部出土遺物（第16図-2）

墳丘斜面部の精査時に古墳に伴うものと考えられる土師器片が1点出土している。

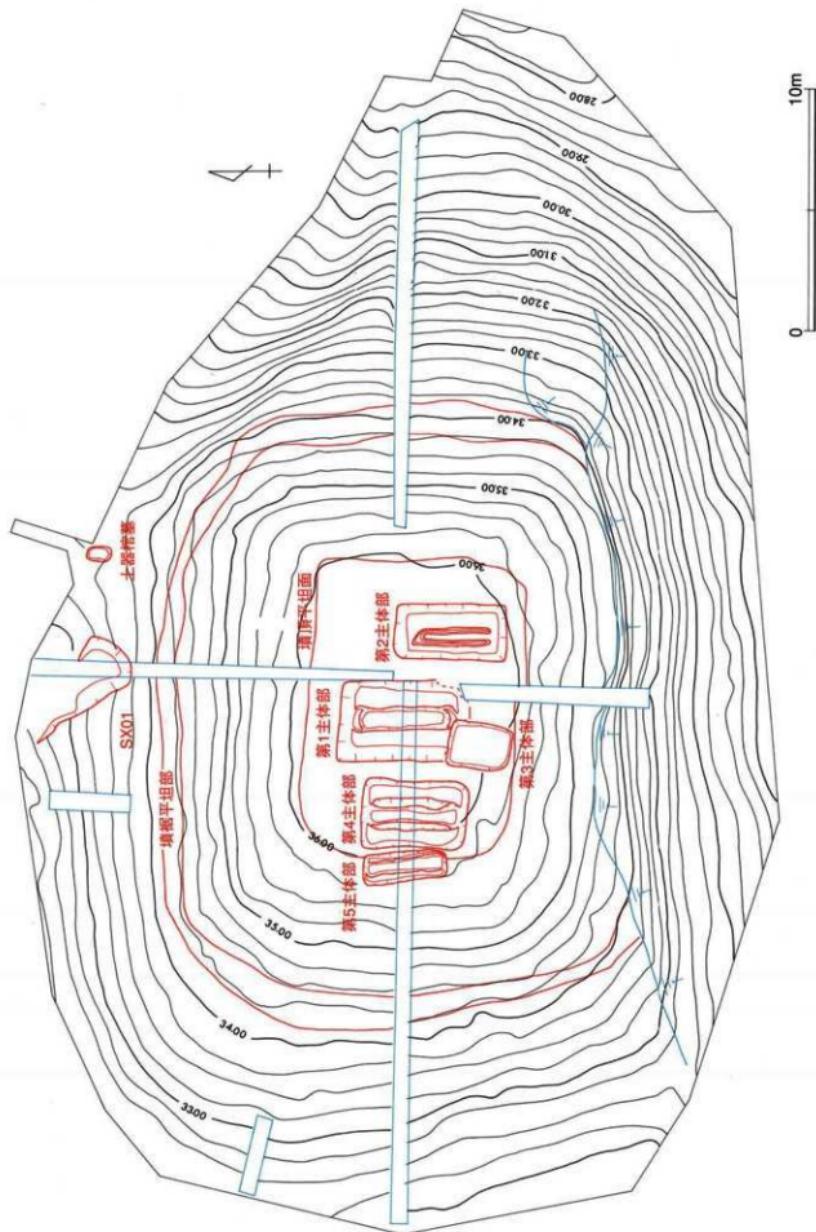
この土師器は在地の複合口縁の壺である。口径29cm、残高9.9cmを測る。口縁部は直立しており、口縁端部には幅5mmの平坦面を持ち、下段の突出は短い。内面頭部以下には横方向のケズリを施しており、それ以外の部分は横方向のナデ調整を施している。頸部には無輪羽文が施されている。器壁は厚く、口縁部で1cm、頸部で1.4cmを測る。胎上には直径2mm以下の砂粒を多く含む。型式は小谷式である。

出土状況は墳丘上部からの流れ込みと思われる。出土地点付近には同一個体と思われる破片はなかった。以上のことからこの上器は、墳丘の築造年代を考える上で重要な出土遺物ではあるが、直接的に築造時期を示すものと言えない。

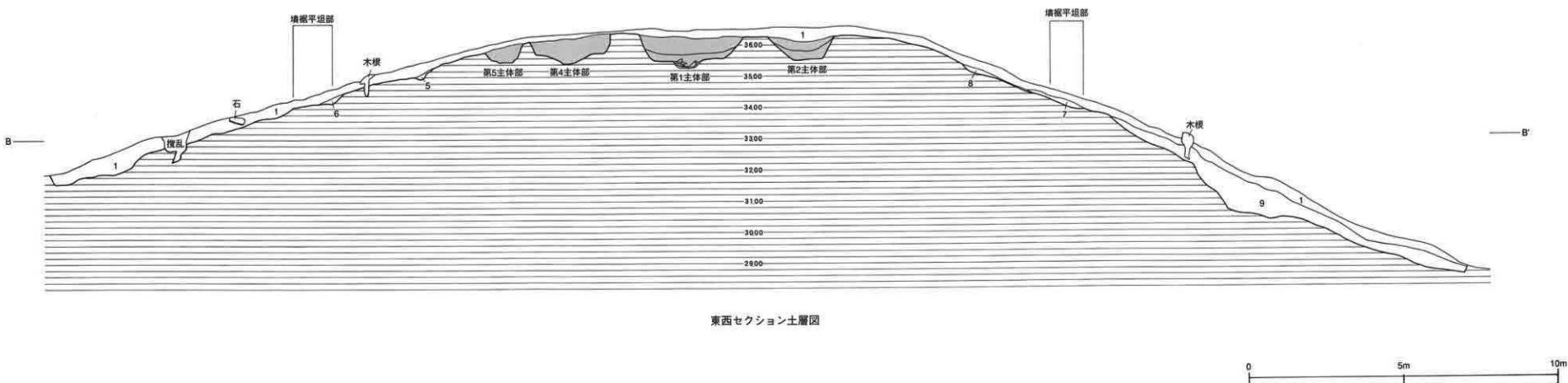
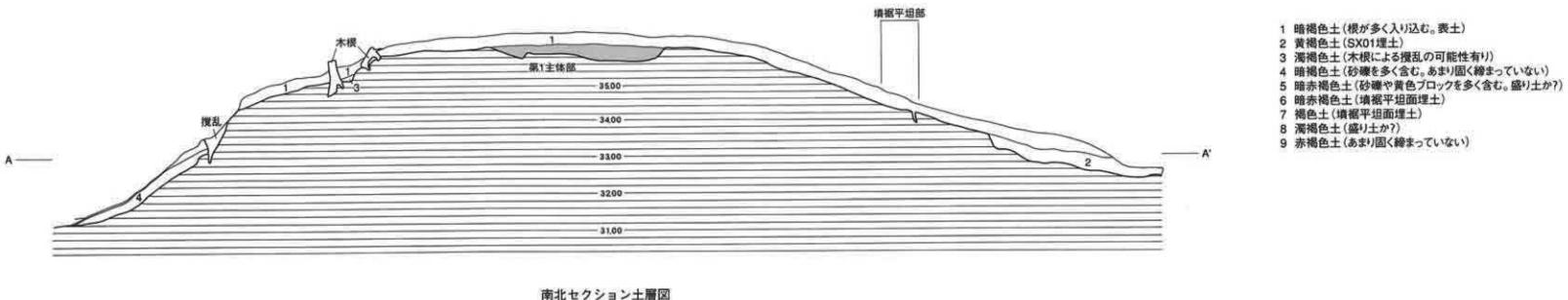
2 埋葬施設

主体部の配置 1号墳の墳頂平坦部からは5つの埋葬施設を検出した。それぞれの主体部は検出順に第1～第5主体部と呼称している。5つの主体部はいずれも南北方向に主軸をとっており、墓壇の幅からいざれも頭位は北であると考えられる。

第1主体部は中央部に位置し最大規模のものである。この第1主体部が1号墳の中心的な埋葬施設と考えられる。第2主体部は1号墳の東側に位置する。第3主体部は第1主体部の南西側に位置し、コーナー付近が切り合っている。第4主体部は第1主体部の西側に位置する。第5主体部は第4主体部の西側に位置する。また、各主体部の墓壇底面を比較すると第1主体部は31.6m、第2主体部は35.5m、第3主体部は34.8m、第4主体部は35.4m、第5主体部は35.44mを測る。

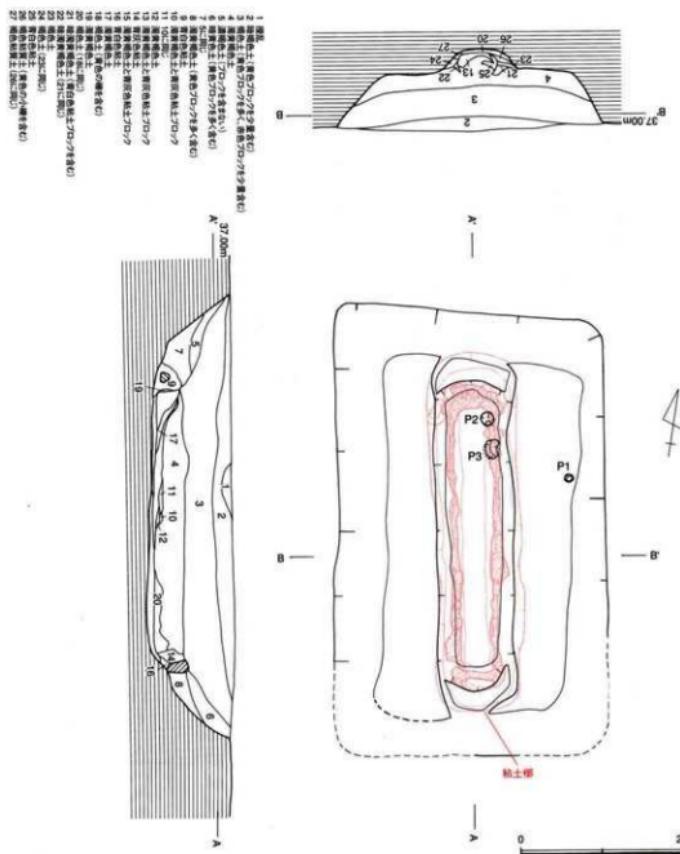


第5図 布志名大谷I遺跡（1号墳）造構配置図 ($S=1/200$)



第6図 布志名大谷I遺跡1号填東西南北土層変測図 (S=1/100)

第1主体部（第7図・第8図）



概要 第1主体部は墳頂部中央に位置する粘土櫛を伴う割竹形木棺墓である。墓壙の形状は2段掘りとなっていた。

主体部の主軸は、N-8°-W（座標軸による。以下主体部軸は、それによる。）を測り、ほぼ南北方向である。尚、墳丘調査時の断ち割によって墓壙の東西方向で破壊した部分が存在する。第3主体部と切り合っており、第1主体部が先行して設置されている。

墓壙 墓壙の規模は検出面上端で南北5.44m、東西3.26m、深さ1.10mを測る。底面では南北4.34m、東西2.44mを測る。

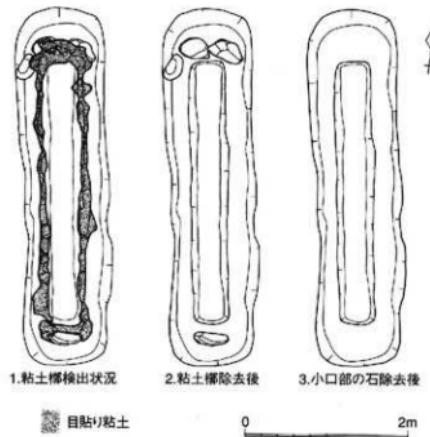
2段目の掘り方は南北3.81m、東西0.96m、底面は3.40m、東西0.69m、1段日の底面から26m深く掘削傾斜するテラスが設置されていた。

墓壙の底面では3つの小ピットを検出した。一つは東側のほとんど墓壙壁面に接する地点で垂直に掘り込まれていた。残りの2つは隣接しており、2段目墓壙底面の北側の地点にやや斜めに掘り込まれていた。3つのピットの埋土は共に炭化物を含む粘質土であった。これらのピットの性格は不明である。

木棺 割竹形木棺自体は残存していなかったが、粘土模等から割竹形木棺の存在と大きさを確認することができた。この割竹形木棺の大きさは長さ約3.2m、横幅は45cmを測る。割竹形木棺の縱幅は木棺の上面が残っていないため不明であるが、木棺の最大幅の部分から木棺底面までが約12cmである。木棺の縱幅はその二倍の24cmと推定される。

木棺の木口部には頭位と思われる北側には3つの石を、南側には1つの石を設置していた。土層観察からこれらの石は木口の板材の外側に設置されていたことが確認できた。木口部の板材の押さえに使用されていたとも考えられるが、北側と南側で石の数が異なる理由は不明である。木棺の底面外側からは小腰を含む鋸歯土が検出された。

粘土層 この粘土層は木棺全体を包みこむものではなく、木棺の側面部と天井部に在り、底部にはなかった。棺側部では約10cmの厚さで貼り付けられ、木口部では石の刷りまで貼り付けられており厚い部分では約24cmも貼り付けられていた。木棺天井部の粘土は棺内に崩落している状況で検出された。天井部に崩落した粘土の量は側面部や木口部と比べると少いことから、天井部へは薄く粘土を貼り付けたものと思われる。粘土の厚さは均一に塗りつけられたものではなく、側面部と木口部に関して言えば掌大のものを幾つも貼り付けた状況であった。



第8図 第1主体部粘土標準実測図 (S=1/60)

構築の順序 土層観察、平面プランなどから第1主体部の構築の手順は①墓塚を掘る、②木棺設置個所を墓塚底面から更に20cm深く掘る、③3つ的小ピットを掘り炭化物が関わる何らかの行為を行う、④木棺設置個所の底面に褐色土を敷く、⑤木棺を設置する。⑥木棺の木口に石を置く。⑦日貼りの粘土を底面以外に貼り付ける、⑧墓塚の埋め戻しをする、と推測される。

第1主体部は5つの主体部のなかでは最も大きい点、頂上部平坦面の中央に設置されている点、割竹形木棺が使用されている点から、5つの主体部及び土器棺墓のなかで最も古い埋葬施設であると考えられる。なお、副葬品等は確認できなかった。

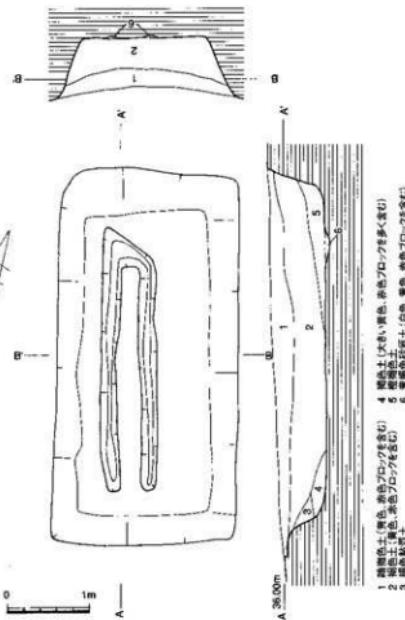
第2主体部（第9図・第16図）

概略 第2主体部は、第1主体部に平行した軸をとり、東側に位置する。主体部の主軸はN-12°-Wを測り、ほぼ南北方向である。墓塚は2段墓塚を呈している。上塚の底部では箱形木棺を設置した痕跡を確認できた。

墓塚 墓塚の規模は検出面上端で南北4.64m、東西2.22m、深さ0.70mを測る。底面では南北3.72m、東西1.63mを測る。

墓塚底面に残る痕跡 墓塚底面に残る痕跡から箱形木棺の大きさは、長さ約2.5m、幅50cmであったと思われる。

出土遺物 北側木口の付近から鉄族の茎が1点出土した。長さ36mm、幅8mm、厚さ3mm、重さ3.86gで内部は中空になっており、鉄板の厚さは1mmを計る。



第9図 第2主体部実測図 (S=1/60)

第3主体部（第10図・第11図）

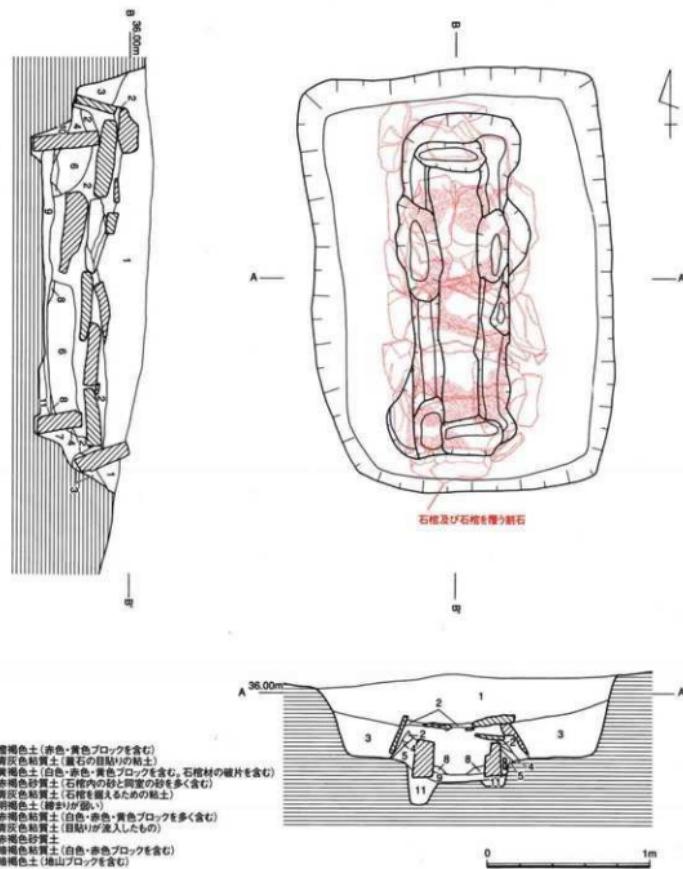
概略 第3主体部は、第1主体部にはば平行した軸をとり、南西側に位置する。主体部の主軸はN-4°-Eを測り、ほぼ南北方向である。第1主体部と切り合っており、第3主体部が後に設置されている。埋葬施設の石棺は割石で覆われていた。また、石棺を覆う割石の天井部の外向には粘土による日貼りが施してあった。墓塚の形状は2段掘りとなっており、2段目には石棺を設置している。

墓塚 墓塚の規模は1段目は検出面上端で南北約2.60m、東西約1.85mを測り、底面では南北約2.37m、東西約1.56mを測り、検出面からの深さは約0.4mを測る。2段目は掘り方上面で南北約2.11m、東西約0.62mを測り、底面では南北約1.89m、東西約0.5mを測り、墓塚1段目の底面からの深さは約0.16mを測る。

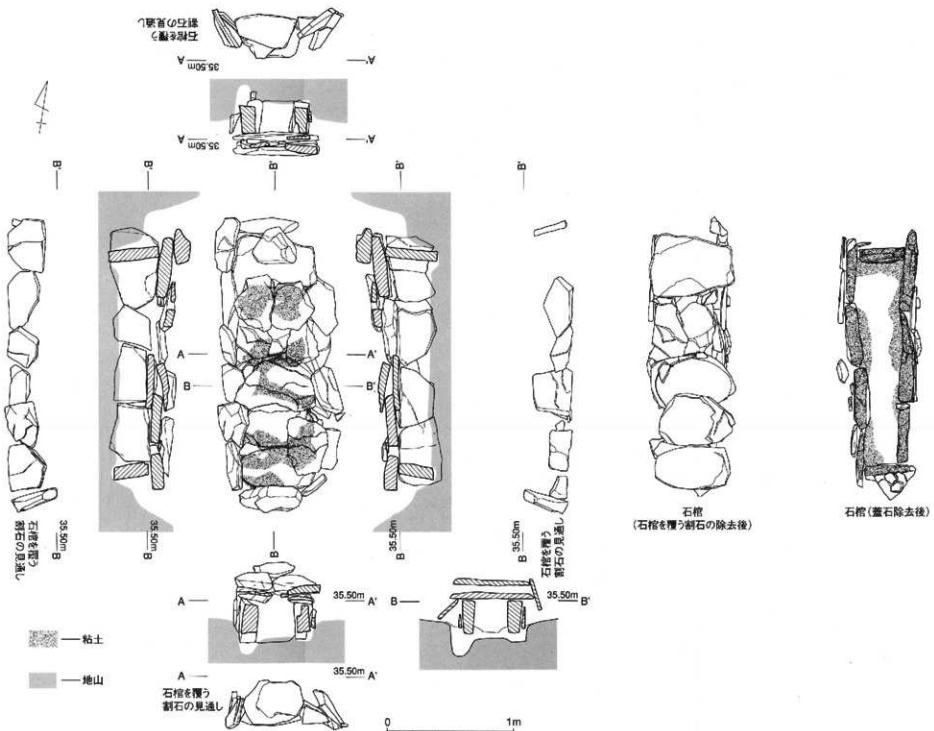
石棺を覆う割石 天井部には5枚、北側に1枚、南側に1枚、西側に6枚、東側に5枚の割石を配置している。合計18枚の割石で構成されているが、石棺を完全に密封しているとはいえない状況であった。特に天井部は石棺のかなりの部分が露出していた。

天井部のうち一番北側にある割石は三角形を呈しやや厚く他の割石と異なる。また天井部の石櫛の外側には所々に粘土が貼り付けられていた。

側面部の割石はいずれも内側にやや傾斜していた。側面部の石櫛はほぼ全周しているが北西コーナーが1枚分ほど空間があった。石櫛は側面を設置した後に天井部を設置している。



第10図 第3主体部実測図 (S=1/30)



第11図 第3主体部埋葬施設実測図 (S=1/30)

石棺 石棺の大きさは外形が長さ約1.84m、幅は北側で約0.56m、南側で約0.40mを測り、内側が長さ約1.84m、幅は北側で約0.37m、南側で約0.26mを測り、高さ約0.20mを測る。蓋石に5枚、北側に1枚、南側に1枚、西側に4枚、東側に4枚、合計15枚の割石を使用して構築している。割石の厚さは約6cmのものが1枚、約12cmのもの9枚使用されている。また、西側側面の北側に2枚、西側側面の南側に1枚、東側側面の北側に2枚、合計5枚の厚さ4cm程度の割石が石棺の外側に設置されていた。これらの薄い割石は石棺の割石の継ぎ目に設置されている。

石棺の側面の割石の高さはほぼ同じレベル（標高35.70m程度）に揃えて整形されているが、やや北側が高くなっている。

石棺にも日貼りの粘土が使用されていた。使用箇所は蓋石と側石の接合面、側石の外側の根本である。いずれも右柳天井部外面に使用されていた粘土と同質の粘土であった。また、石棺内部の側石付近には棺外から流入した粘土があった。

棺内底面には赤褐色の砂が敷かれていた。なお、副葬品等は確認できなかった。

第4主体部（第12図）

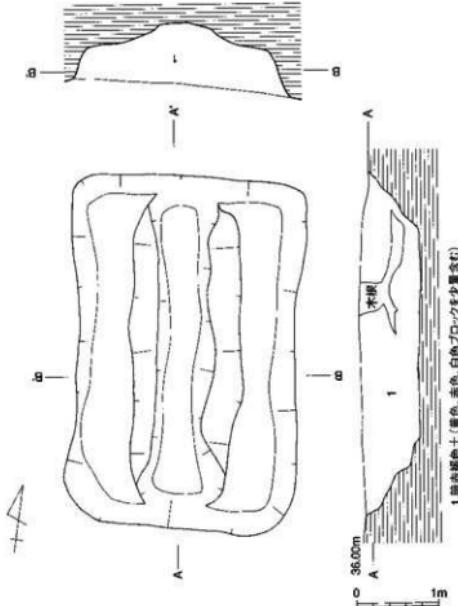
概略 第4主体部は、第1主体部に平行した軸をとり、第1主体部と第5主体部の中間に位置する。主体部の主軸はN-7°-Wを測り、ほぼ南北方向である。2段基壇状を呈している。

第4主体部とは、双方の掘り方の角度などから考えると主体部掘削時には切り合っていたものと思われるが、墳頂部平坦面が削平されているため確実なことは不明である。

墓壇 墓壇の規模は1段目が検出面で南北4.32m、東西2.88m、深さ0.94mを測り、底面では南北3.54m、東西0.46mを測る。

2段目は南北3.68m、東西1.35mを測り、底面では南北3.52m、東西0.46mを測り、1段目の底面からの深さが0.36mとなる。2段目の墓壇は1段日の底面から垂直に掘り込まれておらず、傾斜して緩やかに掘り込まれている。

なお、副葬品等は確認できなかった。



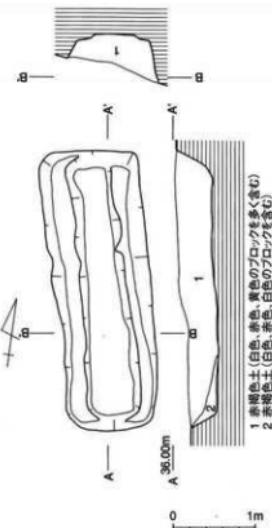
第12図 第4主体部実測図 (S=1/60)

第5主体部（第13図・第16図）

概略 第5主体部は、第1主体部に平行した軸をとり、第4主体部の東側に位置する。主体部の主軸はN-12°-Eを測り、ほぼ南北方向である。2段墓壙となる。

墓壙 墓壙の規模は1段目が検出面で南北約3.47m、東西約1.12m、深さ0.45mを測る。底面では南北3.29m、東西0.85mを測る。2段目は南北3.27m、東西0.56mを測り、底面では南北3.03m、東西0.52mを測り、1段目の底面からの深さは0.08mとなる。

出土遺物 墓壙底面北西側から鉄製直刃鎌が1点出土した。刃先を北に、刃部を東に向かた形で検出された。長さ11.3cm、幅2.2cm、厚さ3mm、重さ30.43gを測り、折り返しは斜めに折られている。刃部には木質部分が認められるが、これらは木棺の一部が付着したものと思われる。この他に副葬品は認められなかった。



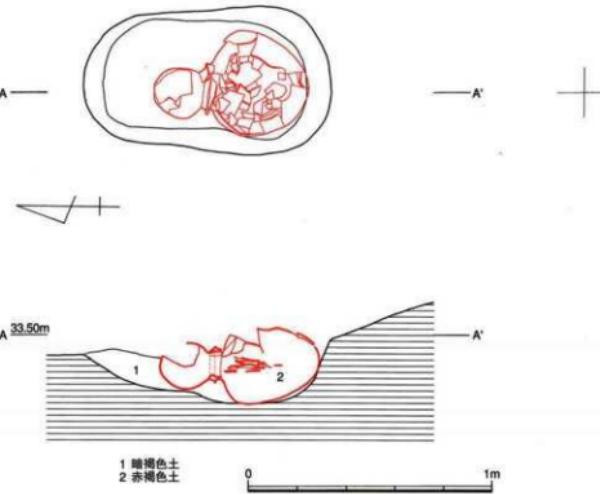
第13図 第5主体部実測図 (S=1/60)

土器棺墓（第14図・第17図）

概略 土器棺墓は墳丘裾部の北側2.80mに設置されていた。主軸はN-1°-Eを測り、ほぼ南北方向である。小形の壺形土器と大形の壺形土器が口縁部を合わせて配置してあった。

墓壙 墓壙の平面プランは隅丸長方形で中央部がややくびれている。また、北側を浅く南側を深く掘ってある。これは

北側に小形の壺形土器を、南側に大形の壺形土器を配置し、土器棺自体を水平に設置するためであろう。規模は検出面で南北約1.01m、東西約0.62m、深さ0.3mを測る。底面では南北0.84m、東西0.47mを測る。墓壙底面では南北3.54m、東西0.46mを測り、1段目の底面からの深さは0.3mとなる。大形の壺形土器の最大径は41.9cmである



第14図 土器棺墓実測図 (S=1/20)

が、このことを考慮すると墓壙の深さは浅いように思える。土器棺の上には盛り土などが施されていたものと考えられる。

出土遺物 土器棺に使用された小形と大形の壺形土器が2点出土した。出土状況は前述の通りで北に小形の南に大形の壺形土器を配置していた。出土状況は大形の壺形土器の口縁部に小形の壺形土器の口縁部を入れ込むというもので、小形の壺形土器の口縁部突帯に大形の壺形土器の口縁端部が引っかかる状況であった。また、土器棺の地表側は壊れており棺内には土が流入していた。

小形の壺形土器の大きさは口径15.8cm、頸部径13.9cm、器高25.0cmである。土器の風化は著しく、特に底部と器壁外面は顕著であった。型式は小谷式である。大形の壺形土器は口径18.1cm、頸部径20.1cm、胴部最大径41.9cm、器高43.9cmである。口縁部はやや内傾しており、口縁部突帯はやや上向きに突出し、胴部上半外面にはカキ目状の調整が施されており、内面の頸部以下は横方向のケズリが施され、底部は丸底となっている。型式は小谷式である。

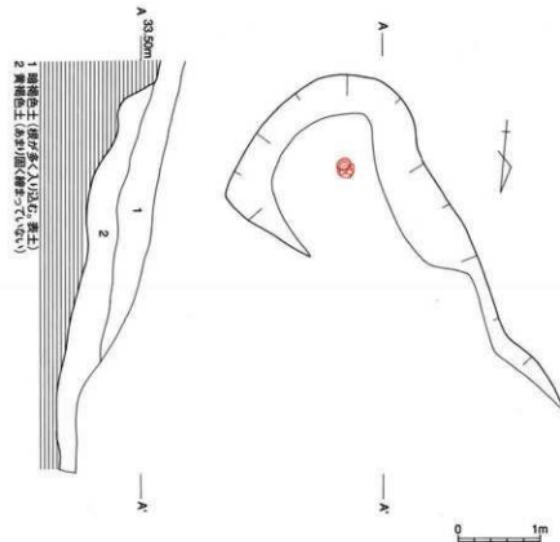
SX01（第15図）

概略 墳丘裾部の北側1mの地点で確認された。地山に掘り込まれた土壙で、完形の壺形土器が床面から出土した。平面プランは三角形をしており、長さ約5.13m、最大幅2.5mを測る。遺構の底面は約10°で傾斜している。

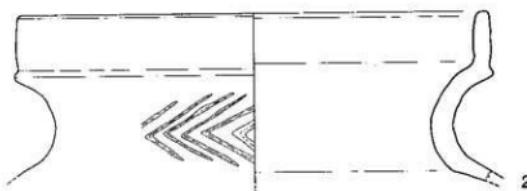
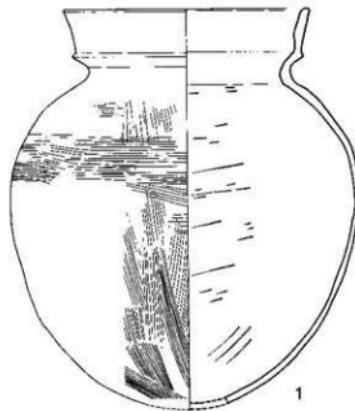
時期は出土土器から小谷式期と考えられる。墳丘との前後関係は、墳丘出土土器や土器棺と同じ時期であること、遺構が墳丘裾部平坦面を破壊していないことから、墳丘が築造される直前か墳丘が築造された後と考えられる。

遺構の性格は不明であるが、推測される墳丘との時期的な前後関係から墳丘とは無関係ではないと考えられる。

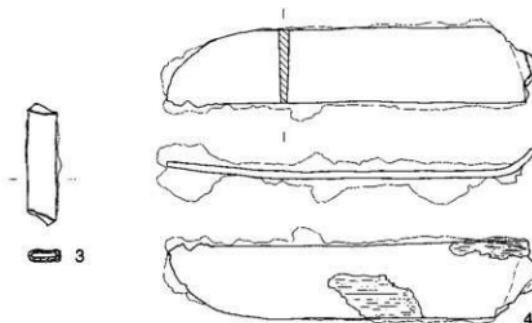
出土遺物 ほぼ完形の壺形土器が1点出土した。遺構の床面直上に口縁部を上に底部を下にして出土した。口径15.2cm、頸部径12.4cm、胴部最大径21.5cm、器高24.6cmである。口縁部はやや外傾し、胴部外面にはカキ目状の調整が施され、内面の頸部以下は横方向のケズリが施され、底部は丸底となっている。型式は小谷式である。



第15図 SX01実測図 (S=1/60)

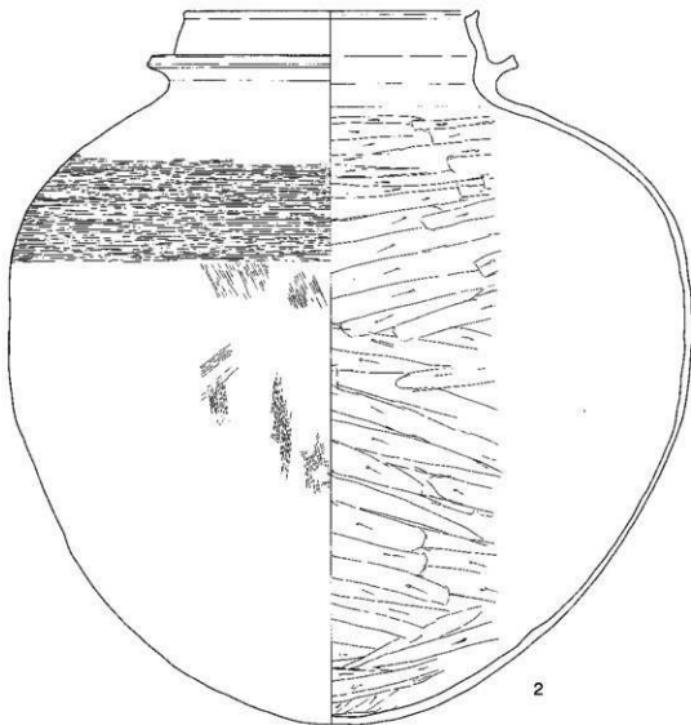
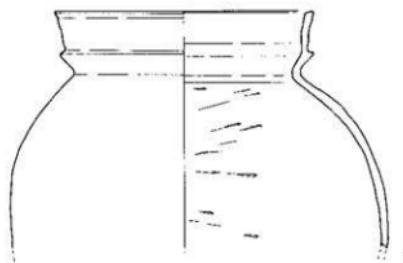


(S=1/3) 0 10cm



(S=2/3) 0 5cm

第16図 布志名大谷1号墳出土遺物（1）



第17図 布志名大谷1号墳出土遺物（2）(S=1/3)

第3節 まとめ

築造年代 1号墳の築造年代は、墳丘の盛り上や第1主体部からの出土遺物が無いため確実な時期は不明であるが、墳丘斜面出土土器や土器棺やSX01出土上土器がいずれも小谷式であることから小谷式期の可能性が高いと思われる。また、小谷式でもSX01出土土器は神原神社古墳出土土器より新しい特徴を示し、土器棺の大形壺形土器は上井・砂遺跡より新しい特徴を示し、墳丘斜面出土土器は松本1号墳出土土器に近い特徴を示している¹⁰。以上のことから、小谷式期の新相に築造されたものと思われる。これは、前方後円墳共通編年¹¹の3期にあたる。

埋葬の順番 主体部のうち切り合いを確認できるものは第1主体部と第3主体部のみである。その先後関係は前述の通り第1主体部が古く第3主体部が新しい。この他の主体部については切り合っていないため、平面プラン状の位置関係等から推定する。まず、5つの主体部のうち最古のものは墳丘頂部平坦面の中心に位置し、最も規模の大きな第1主体部と思われる。その次に古いものは第1主体部に隣接する第2主体部か第4主体部と思われる。その次に古いものは第2主体部に隣接する第5主体部か第1主体部と切り合う第3主体部と思われる。即ち5つの主体部の埋葬の順番は、①第1主体部、②第2主体部又は第4主体部、③第3主体部又は第5主体部となる。上器棺墓は墳丘平坦面を破壊することのない場所にあることから墳丘築造後に設置されたと思われる。

粘土櫛 第1主体部の粘土櫛は前述の通り木棺全体を包むものではなく、同時期の近畿地域における粘土櫛と比較した場合、粘土櫛とは言えないものかもしれない。近畿地域の粘土櫛の推移と比較すると布志名大谷1号墳の粘土櫛は古墳時代中期の形態にあたる¹²。しかしながら出土土器から考えられる時期は明らかに前期である。この場合2つのケースが考えられる。1つは出雲地域において布志名大谷1号墳以前に存在する粘土櫛が変質して伝播した場合、もう1つは同時期の近畿地域を含めた他地域の粘土櫛が変質して伝播した場合である。現状では布志名大谷1号墳に先行する出雲地域の粘土櫛は知られおらず、従って前者の可能性は低い。同時期の類例では松本1号墳がある。松本1号墳第1主体部では箱形木棺の棺床と棺側に粘土を使用している。また、粘土を使用しているという点では寺床1号墳もある。寺床1号墳第1主体部では櫛櫛内で割竹形木棺の木口をとめたと思われる粘土が確認されている。いずれも不完全な粘土櫛という点では布志名大谷1号墳と共通するが、粘土櫛の不完全な特徴は様々である。また、櫛櫛使用（寺床1号墳）、箱形木棺の使用（箱形木棺の使用）といった点も布志名大谷1号墳とは異なる。この状況は、当時の出雲地域では近畿地域のような定型化した粘土櫛の概念がなく不完全な形で粘土櫛を採用した、という後者の場合を支持するものと考えられる。

布志名大谷1号墳の位置づけ 布志名大谷1号墳の位置する丘陵には1号墳の北には3基の古墳が（布志名大谷Ⅰ遺跡2号墳、3号墳、4号墳¹³）、西に1基の方墳（布志名大谷Ⅲ遺跡¹⁴）があり、古墳群を形成している。まずこの古墳群における布志名大谷1号墳の位置づけを行う。この古墳群のうち時期の判明しているもので布志名大谷1号墳より古いものはない。また規模の大きいものもない。丘陵上における古墳の配置も1号墳が丘陵最高所にあり、他の古墳は1号墳より派生する状況にある。以上のことにより1号墳は古墳群の中心となる古墳と位置づけることができる。

次に宍道湖南岸地域・松江市南部地域での位置づけを行う。現在この地域において同じ時期に築

造されたと旨える古墳は宍道町上野1号墳のみである。また、これらの古墳に先行して築造された古墳は現在知られていない。現状ではこの地域における最も古い古墳といえる。

次に出雲地域における位置づけを行う。第2表からわかるように3期の出雲地域の古墳は墳丘規模で大きく3種類に分かれる。1つは墳丘の最大幅が20m前後で高さが約2m前後の古墳（以下小規模古墳と呼ぶ）で、1つは墳丘の最大幅が25m以上35m以下で高さが約2m以上3m以下の古墳（以下中規模古墳と呼ぶ）で、1つは墳丘の幅が40m以上で高さが4m以上の古墳（以下大規模古墳と呼ぶ）である。小規模古墳は副葬品が少ないのに対して、中規模・大規模古墳は副葬品が多い。また、小規模・中規模古墳は主体部が5か6基設置されることが多いのに対して、大規模古墳は主体部が1～3基設置されることが多い。この分類に当てはめると布志名大谷1号墳は小規模古墳となる。

以上のことをまとめると、布志名大谷1号墳は布志名地区周辺において最古の古墳であり布志名大谷古墳群の起点となる古墳といえる。しかしながら出雲地域では小規模な古墳である。古墳時代中期以降には大角山1号墳⁽⁶⁾が造営されるこの地域も、前期では大規模古墳を造営する力が無かつたものと思われる。

【注】

- (1) 松山曾弘氏の御教示による。
 - (2) 近藤義郎編『前方後円墳集成』中・四国編 山川出版 1991
 - (3) 柳本照男氏より「近畿地域で粘土櫛と呼ぶものは大阪府貴金塚古墳中央部といった、棺床粘土、棺側粘土、被覆粘土を備えたものである。従って、布志名大谷1号墳の場合は棺床粘土が欠如しているため粘土櫛とは呼べない。また、粘土櫛の形態の推移は、①完全な粘土櫛（棺床、棺側、被覆に良質の粘土を多量に使用）、②不完全粘土櫛（棺床、被覆には不良な粘土を使用し、木棺の接合部に良質の粘土を使用）、③粘土を一部に使用するもの（木棺の木口と接合部に粘土を使用する）となり、時期は①が古墳時代前期、②と③が古墳時代中期となる。」との御教示いただいた。
 - (4) 島根県教育委員会『布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡』 1997
 - (5) 島根県教育委員会『布志名大谷Ⅲ遺跡』 1997
 - (6) 大角山1号墳は全長61.4m、高さ4.5mの前方後円墳で築造時期は5世紀後半から6世紀後半と考えられている。
- 島根県教育委員会『島根県消防学校に伴う大角山遺跡発掘調査報告書』 1988

第2表 出雲地域における共通編年3期の古墳

第3表 布志名大谷1号墳主体部計測値表

遺構名	1段目			2段目			埋葬施設 形態	方位
	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	長径(m)	短径(m)	深さ(m)		
第1主体部	5.44	3.26	1.10	38.1	0.96	0.26	剖竹形木棺	N-8°-W
第2主体部	4.64	2.22	0.70				箱形木棺	N-12°-W
第3主体部	2.60	1.85	0.40	2.11	0.62	0.16	箱形石棺	N-4°-E
第4主体部	4.32	2.88	0.94	3.68	1.35	0.36	不明	N-7°-W
第5主体部	3.47	1.12	0.45	3.27	0.56	0.08	木棺	N-12°-W
土器棺	1.01	0.62	0.30				土器棺	N-1°-W

第4表 布志名大谷1号墳出土遺物観察表

捕団番号	図版番号	出土地点	器種(cm)	口径(cm)	高さ(cm)	色調	胎土	備考
第16回-2	図版18	填丘斜面	壺	29.0	9.9	暗赤褐色	砂粒を多く含む	小谷式
第17回-1	図版18	下器棺墓	壺	15.8	25.0	黄褐色	砂粒を含む	小谷式
第17回-2	図版18	上器棺墓	壺	18.1	43.9	黄褐色	砂粒を含む	小谷式
第16回-1	図版18	SX01	壺	15.2	24.6	黄褐色	砂粒を含む	小谷式

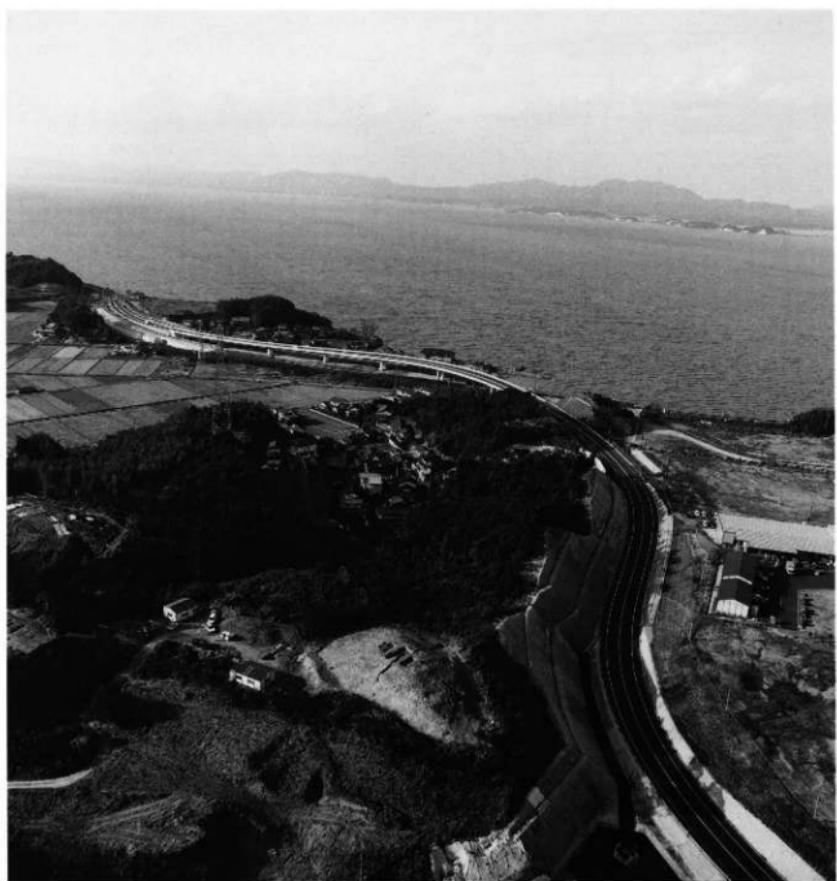
捕団番号	図版番号	出土地点	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第16回-3	図版18	第2主体部	鉄劍	36	8	3	3.86	柄部分のみ
第16回-4	図版18	第5主体部	鉄製直刃鎌	113	22	3	30.43	木質が付着

図版

凡例

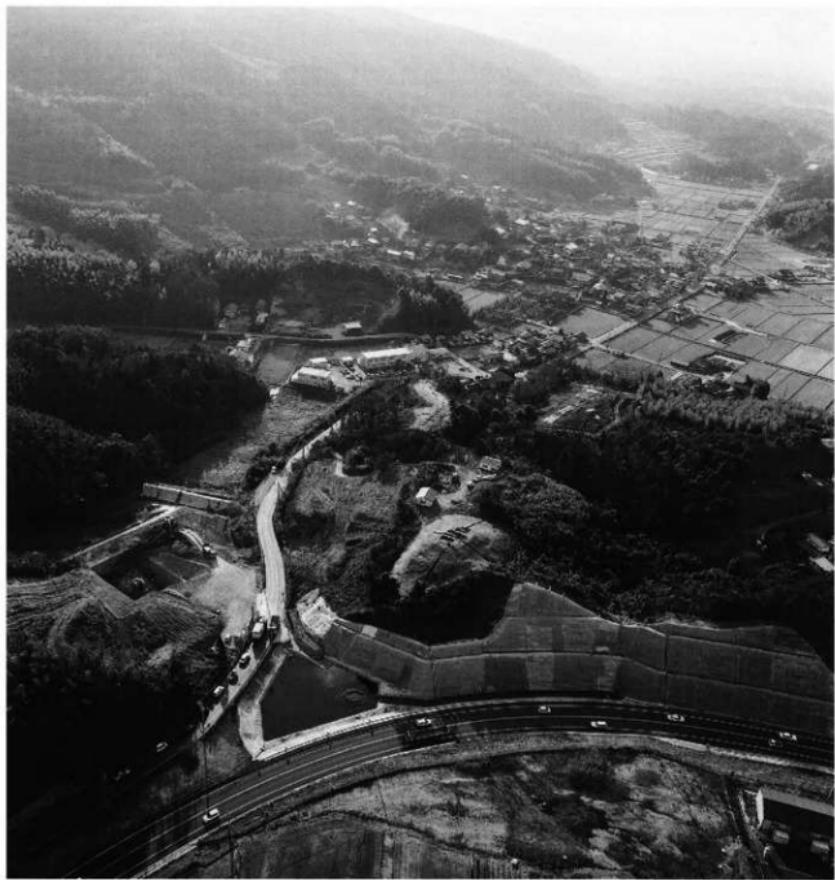
造物写真の番号（○—△）は、本文中の挿図番号（第〇図△）に対応する

図版 1

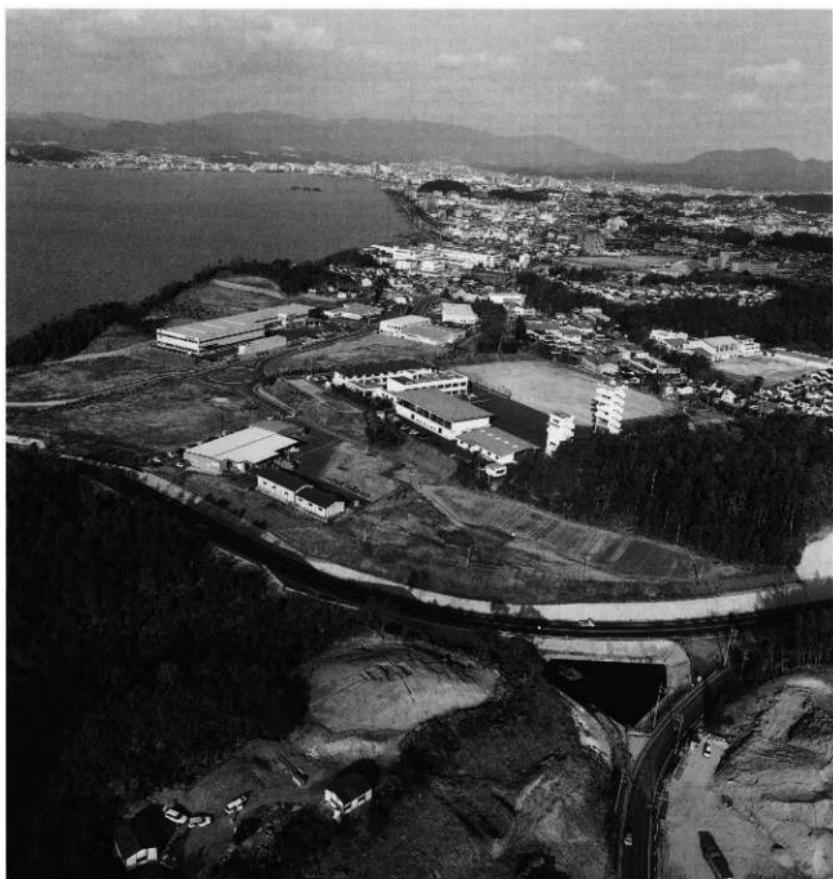


宍道湖を望む

図版 2



布志名地区を望む

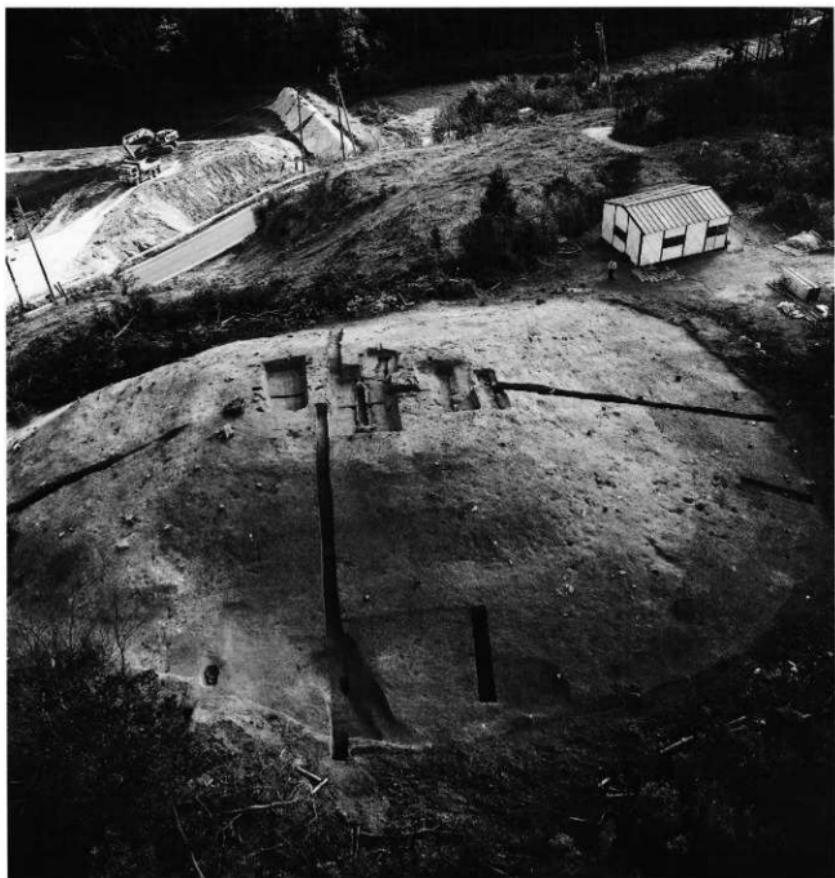


松江市街地を望む

図版 4



上空からの撮影



布志名大谷 I 遺跡（1号墳）全景

图版 6



第1主体部
木口部石除去状況



第1主体部
完掘状況



手前から
第1主体部
第3主体部
第4主体部
第5主体部
完掘状況



図版 8



第1主体部
粘土郴南北セクション南側



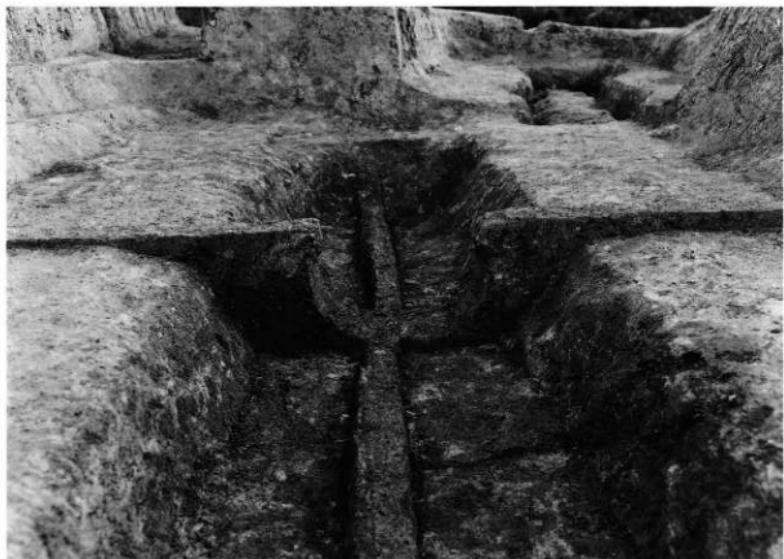
第1主体部
南側木口部粘土郴流入状況



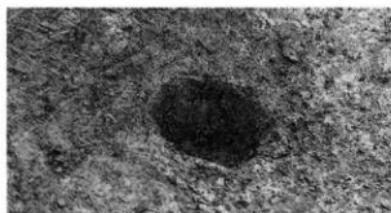
第1主体部
南側木口部セクション



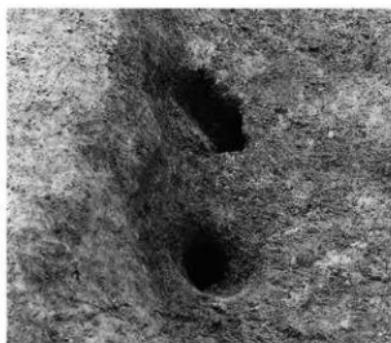
図版 10



第1主体部 東西セクション



第1主体部 Pit.1



第1主体部 Pit.2、Pit.3



第1主体部 遺体埋葬状況推定

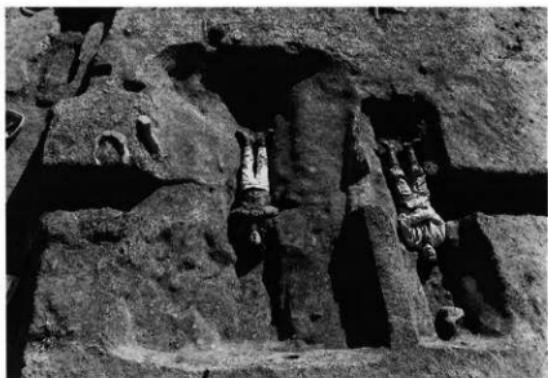
第2主体部
完掘状況



第4主体部
第5主体部
完掘状況



第4主体部
第5主体部
遗体埋葬状况推定



図版 12



第3主体部 石棺を覆う割石検出状況



第3主体部 石棺を覆う割石の目貼り粘土除去状況



第3主体部 石棺を覆う割石・石棺天井部除去状況



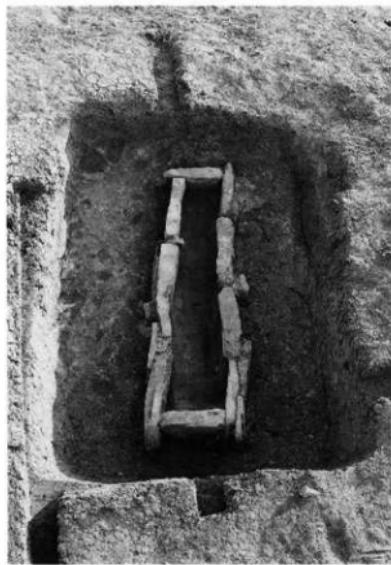
第3主体部 石棺を覆う割石側面検出状況



第3主体部 石棺を覆う割石除去状況



第3主体部 石棺検出状況



第3主体部 石棺目貼り粘土除去状況



第3主体部 完掘状況

図版 14



第3主体部
石棺を覆う割石・石棺天井部
除去状況



第3主体部
石棺を覆う割石除去状況



第3主体部
石棺検出状況

第3主体部
南北セクション



第3主体部
南側木口部石検出状況



第3主体部
南側木口部石除去状況



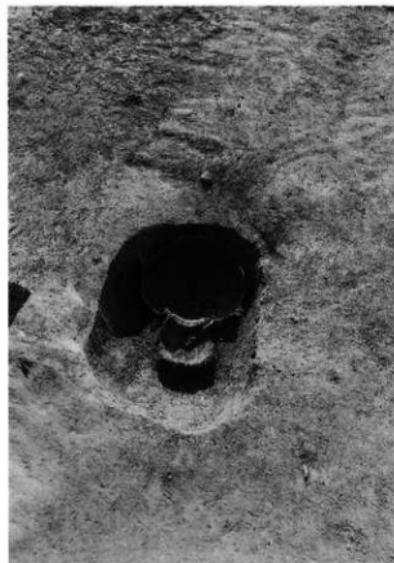
図版 16



土器棺墓 棚出状況



土器棺 出土状況



土器棺内泥土 廃去状況



土器棺墓 完掘状況



SX01 完掘状況



墳丘斜面出土土器の出土状況

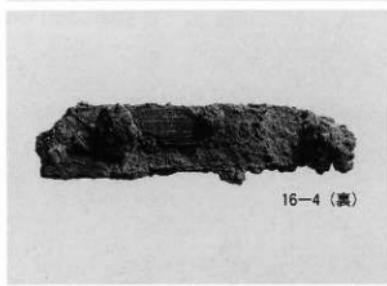
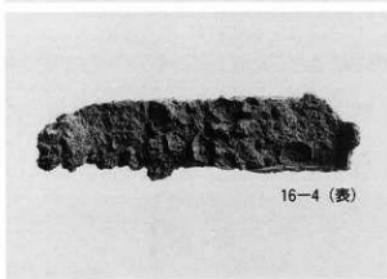
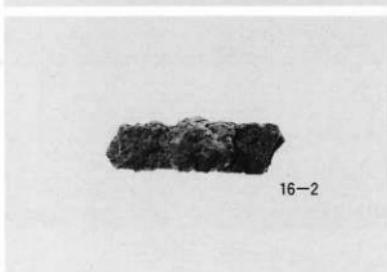


墳頂より宍道湖を望む



布志名大谷 1号墳遺景

図版 18



報告書抄録

ふりがな	ふじなおおだにいちいせき（いちごうふん）					
書名	布志名大谷I遺跡（1号墳）					
シリーズ名	一般国道9号松江道路（連結部）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	1					
編集者	是山 敦					
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター					
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33 TEL 0852-36-8608					
発行機関	島根県教育委員会					
発行年月日	2001（平成13）年3月30日					
所取遺跡	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東径	調査面積
布志名大谷 I 遺跡 (1号墳)	島根県八束郡 玉湯町布志名	32306		35°25'50"	133°02'26"	1,900m ²
調査原因	一般国道9号松江道路（連結部）建設による					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	調査年月日	
布志名大谷 I 遺跡 (1号墳)	埋葬遺跡	古墳時代	方墳 粘土椁 石槨	土師器 鉄製直刃鎌 鉄簇	19980818 ～19981228	

布志名大谷 I 遺跡（1号墳）

一般国道9号松江道路（連結部）建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2001年3月 印刷

2001年3月 発行

発行 国土交通省松江国道事務所

島根県教育委員会

印刷業者 高浜印刷